

JAPANESE BOARD ON BOOKS FOR YOUNG PEOPLE

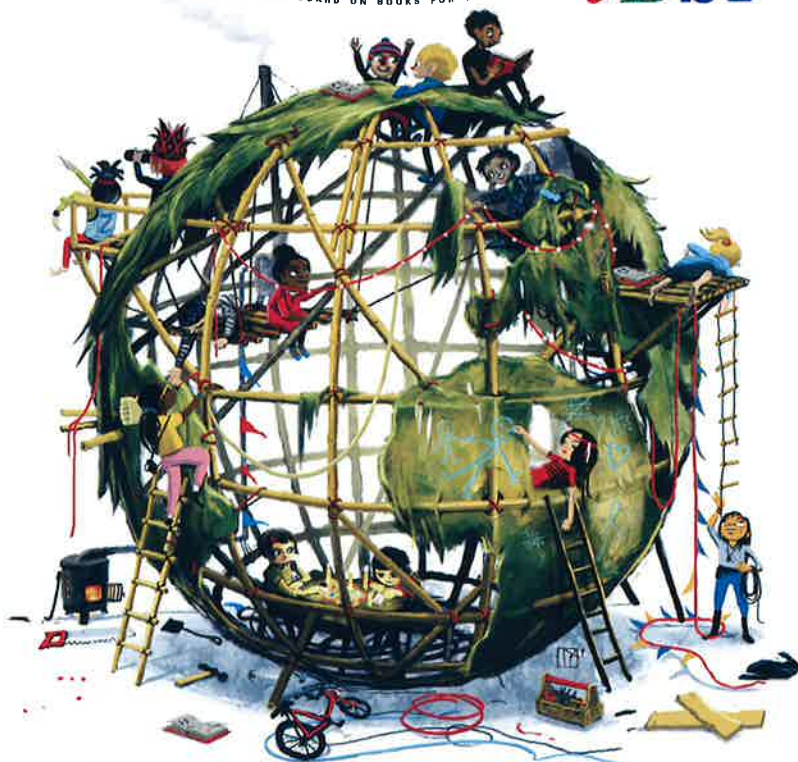
Book & Bread

ブック アンド ブレッド

INTERNATIONAL CHILDREN'S BOOK DAY 2 APRIL 2018

GRĀMATĀ MAZĀIS IR LIELS
THE SMALL IS BIG IN A BOOK
LOS LIBROS HACEN GRANDE LO MÁS PEQUEÑO
DANS UN LIVRE, LE PETIT EST GRAND
IM BUCH IST DAS KLEINE GROß

INTERNATIONAL BOARD ON BOOKS FOR YOUNG PEOPLE **iBbY**



Latvia
100

iBbY
LATVIA

Copyright © Reinis Pētersons 2017

JBBY

一般社団法人 日本国際児童図書評議会

2018
MARCH
VOL.134

IBBYは、世界中で激変にさらされている子どもたちの未来のために
すべての子どもの本の関係者に向け、行動を呼びかけます

IBBYからの行動の呼びかけ



国際児童図書評議会 (IBBY) は、60年の間、本は人々の間に橋を架けるといふ考えを追求してきました。本は私たちに翼をあたえ、恐怖や不寛容の上に築かれた壁を壊すことができます。

この活動は、60年前と同様、世界中で多くの子どもたちが環境の激変にさらされている現在でも重要で意義のあるものです。私たちは今地球規模での危機のさなかにありますが、IBBYは平和と理解を求めて努力している人々たちに対する支援をしっかりと続けていきます。私たちは、すべての子どもに本を読む権利があると信じ、「子どもの権利条約」の原則を全面的に支持しています。

IBBYは、ヨーロッパにおける難民の子どもであろうと、アフリカ、中東、アジア、オセアニア、北アメリカ、ラテンアメリカの子どもであろうと、危機にさらされている子どもたちを支える努力を続けています。サイレント・ブックス(文字のない絵本を図書館で収集し、それを地元の子どものみでなく難民・移民の子どもにも提供するプロジェクト)、本のセット、図書館ネットワークの導入などさまざまな活動を行っており、こうした活動はどれも、子どもたちが直面しているトラウマを軽減するのに役立っています。私たちはまた世界の様々な地域の子どものために、新しく隣人となる者を歓迎し、その人たちと一緒に仲良く暮らす方法を示す必要もあります。私たちは、お話や図書館がこうした必要に応えることができると確信しています。

私たちは今、子どもの文学や図書の分野で働いているみなさんに要請します。現在混乱の渦中であって苦しんでいる子どもたちを助ける行動を起こし、解決策を模索するための仲間になってください。

2016年8月21日
ニュージーランド、オークランド市
第35回IBBY世界大会

目次 contents

- 4 ● インタビュー ●
描いているときは、生きている実感がある
— ミロコマチコさん(画家)
- 10 ● 国際子どもの本の日 2018 ●
- 12 ● JBBY/IBBYニュース&イベント ●
IBBY記者会見 於:ポローニャブックフェア
・IBBY山田基金2017年度支援先
・第24回IBBY朝日国際児童図書普及賞
・2018年国際アンデルセン賞
JBBY希望プロジェクト報告
世界のバリアフリー児童図書展2017
世界の子どもの本展2018
子どもの本の日フェスティバル
IBBYニュース
JBBY活動報告(2018年1月~3月)
理事会報告(2018年1月~3月)
- 18 ● 追悼 島多代さん ●
- 22 ● カフェB&B ●
読み聞かせと私
— 市川朝久子さん(児童文学作家)
- 編集後記 ●

<表紙>

今号の表紙は、2018年の「国際子どもの本の日」ポスターです。ラトビアの画家、レイニス・ペーテルソンスさんが描きました。プロフィールは本文10ページをご覧ください。



世界の子どもたち——日本
最先端の自作パソコンで、システム開発中の天才プログラマー
撮影:シーナ・タノ

『Book & Bread』とは

IBBYの会報『Book & Bread』(ブックアンドブレッド)という誌名は、2002年に開催されたIBBY創立50周年記念大会で、IBBY朝日国際児童図書普及賞を受賞したアルゼンチンのペットーリ氏の受賞スピーチに由来します。ペットーリ氏は、「子どもたちにはパンと同時に本が必要です」と訴えました。人間とは何か?人はなぜ生きるのか?ということを考え始める子どもたちに本を届ける役割の大切さを意味しています。この言葉の意味とJBBYの活動を、会員や一般の皆さんに広く伝えたいと、2010年の会報リニューアルの機に、JBBYの会報誌名としました。

画家

ミロコマチコさん
mirocomachiko

描いているときは、 生きている実感がある。

ブラティスラヴァ世界絵本原画展（BIB）で二度目の受賞を果たしたミロコマチコさんに、受賞の喜びと日頃の絵本作りについて伺いました。

聞き手 喜入 今日子
(小学館 編集者)

— このたびは、ブラティスラヴァ世界絵本原画展（BIB）で、前回の金のりんご賞に続き金牌受賞おめでとうございます。BIB2回連続受賞というのは、初めてのことで、連絡を受けたときの感想はいかがでしたでしょうか？

夜の10時半くらいだったと思うんですけど、携帯が鳴って、画面に「スロバキア」って表示されたんです。ところが、よりにもよって、パソコンでお笑い番組を観てたんです（笑）。「あっ」と思って、お笑いを消さなくちゃと、パソコンを閉じたら、電話も切れちゃったんですよ。そのあともう1回かかってきたんですが、それもうまく受けられずに切れちゃった。あわてたら、JBBY事務局から電話がかかってきて、「金牌です」と言われて、「わ——」となった。お笑い

さえ観てなければ、スロバキアからの電話を受け取れたのに。

— 2回目ということで、感動は違いましたか？

そうですね、1度目は、素直に「すごく嬉しい」という感じでしたが、2度目は「なんでなんで？」って。私の中では、賞ってノミネートされる時点で、どれが取ってもおかしくないと思っているので、受賞するかしないかは運だと思うんですよ。私自身、1年に1回子どもの絵のコンクール審査をするんですけど、最後に、「どっちにしよう」ってなるときって、なにかわからない最後のスイッチで「これ！」みたいな感じで決める。自分の頭で追いつかないような決め方なんですよ。

でも前回取っているということは審査員の方たちもわかっ

<プロフィール>

画家・絵本作家。いきものを伸びやかに描き、国内外で個展を開催。絵本『オオカミがとぶひ』（イースト・プレス）で第18回日本絵本賞大賞を受賞。『てつぞうはね』（プロンズ新社）で第45回講談社出版文化賞絵本賞、『ぼくのふとは うみでできている』（あかね書房）で第63回小学館児童出版文化賞、『オレときいろ』（WAVE出版）プラティスラヴァ世界絵本原画展（BIB）金のりんご賞、『けもののおいがしてきたぞ』（岩崎書店）で金牌を受賞。その他の絵本に、『つちたち』（学研プラス）など。また、画文集『ホロホロチョウのよる』（港の人）、画集『けだらけ』（筑摩書房）、『ねこまみれ帳』（プロンズ新社）などがある。2014年伊勢丹クリスマスのメインビジュアルを担当。2016年春より、『コレナンデ商会』（NHK Eテレ）で主に歌の絵を描いている。美術同人誌『四月と十月』の同人。

ていたでしょうから、2回目に選んでもらえたことのほうが、すごいことに思えて、とても驚きました。

— では、日本からノミネートされたときも、今回は無理かなと思っていましたか？

実は思っていました。大使館での授賞式で聞いたのですが、審査員の方たちが、「この子はもう一段階何か変化がないと、グランプリはあげられないね」みたいなことを話していたらしいです。いつかまたノミネートされたときは、みんなをちょっとびっくりさせたいなと思いました。賞を取ることが目的ではないのですが、結果そうなればいいなと思っています。

— ミロコさんは、絵本作家になろうと強く思っていたわけじゃないと伺っていますが、最初はどんなきっかけで絵本を作ったのですか？

人形劇を見たのがきっかけで、児童文学や絵本に興味を持つようになりました。お話を作るのが好きだったので、台本を書きたいと思ってました。

人形劇は大学の4年間やりました。劇団では、台本を書く役割ではあったんですけど、人形劇団っていつも人手が足りないんです。それで、「ちよと猫やって」とか「チヨウチヨ飛ばして」と言われて、どんどん表に出るようになっていった。でももともと人前に出ることは苦手で、人形劇をずっと続けていきたいとは思わなくなった。そして、それまでに読んでいておもしろいと思っていた絵本を、私も作っ

てみたいと思うようになりました。

家には、ちっちゃいときから絵本はたくさんありました。

田島征三さん、『けもののおいがしてきたぞ』（岩崎書店）
征彦さんの本とか、『ぼちぼちいこか』とか、『バーバパパ』も読んでたし、いろんな絵本がありました。というのも、父は末っ子、母は3番目で、いとこたちのおさりの本が全部うちに集まって来たんです。たぶん買ってもらった絵本は1冊もなくて。

小学校高学年になると自然に読まなくなって、絵本の魅力は忘れてしまいました。その間に、絵本は子どもが読むものと思い込んでたり、昔話のように教訓めいたものなのかなくらいに思っていたんです。それが人形劇に興味を持つようになってから、再び絵本を読むようになって、片山健さんや長新太さんの絵本に衝撃を受けました。ナンセンスなものや、すごい勢いがあるものに会って、「そうそう、絵本ってこんなにおもしろかった！」という部分と、より自由すぎる世界を発見して「ガーン」となって、すごいハマったんですよ。

— いちばんハマったのは、どういうところですか？

わけのわからなさとか、こんなことも絵本になるっていう絵本の広さですね。絵本って許容量がめちゃくちゃあって、どんな世界も受け入れてる。子ども時代に読んでたときは、なにも疑問に思わず、わからない言葉でも自然と体に飲



『けもののおいがしてきたぞ』（岩崎書店）